

- 友禅染とゴム -

友禅染は江戸時代に京都で扇絵師として活躍していた宮崎友禅齋が始めたもので、友禅は彼の名前からとられています。日本の代表的な伝統工芸である京友禅や加賀友禅の着物は美しくあでやかで世界に誇れる技です。友禅染の模様をくいいる様にじっと見ると、模様には白い輪郭があることに気がつきます。これは友禅染の特徴の一つである“いとめ(糸目)”と呼ばれる、糊置き跡の跡です。友禅染の工程はゴム製品製造にひけをとらない多くの細かい作業工程に分かれます。以下ざっと説明します。

下絵作業；絹100%の白生地に下絵職人が青花液をつけた筆で下絵を書きます。青花液は紫露草を絞って作られます。水で洗うときれいにとれるので下絵書きには絶好です。

糊置き作業；染色するとき地の色が染まらないように防染する作業です。糊置きには2種類あります。下絵の線の上に置く“糸目糊置き”と模様の部分を覆う“伏せ糊置き”です。現在糸目糊置きにはゴム糊が多く使われています。京都伝統産業工芸会会長吉田氏によると、京都では昭和初期頃から使われるようになったとのこと。当初は天然ゴムを揮発油に溶かし、松やにを加えてゴム糊としたものでした。今は天然ゴムに変わって合成ゴムが用いられています。一昔前までは職人さんがそれぞれ秘伝の配合を持っ

ていらっしまったそうです。ゴム糊を筒紙にいれ、細く押し出しながら下絵の線の上に置いていきます。まさに職人技です。ゴム糊以前はもち米を蒸したものを糊のベースとしたそうです。伏せ糊はもち米の糊ベースに糠を加えて粘りを調整したものが使われています。

その後、引き染めで模様以外の地の部分を染め、色挿しで模様の部分を染めます。更に、蒸し、水元、地直し、加飾仕上げ、...と複雑な作業が進められます。

ところで、天然ゴム(NR)は、コロンプスによって西ヨーロッパに紹介された後、19世紀にイギリスでレインコートに使用されたのは有名な話です。NRをテレピン油に溶かした液体を布に引いて表面には水性を持たせたのです。テレピン油は主に松やにから得られる精油で、ゴム用語辞典によるとピネンが主成分です。沸点は155～180度ですから、テレピン油にNRを溶かしたものはまさにゴム糊状態だったと思われます。

ゴム引き布という全く新しい素材を使って作られたレインコート(C. Macintosh製造・販売)は時代の最先端をいくファッションで、流行に敏感で粋な人々にもてはやされたそうです。それと同じゴム糊技術が日本の伝統工芸という雅の世界で今も脈々と受け継がれています。友禅染用のゴム糊は、阪神淡路大震災以前はその多くが神戸で造られていました。今は大阪へと製造拠点は変わっていますが、その道の達人が造り続けて伝統工芸を支えています。

参照 京都伝統産業工芸会

<http://www.kyoto-story.ne.jp/kougei/>

日本の伝統的工芸品館 <http://www.kougei.or.jp>

(東海ゴム工業(株)長野悦子)



着物と帯 (作者 岸田 博)



裾模様